

吉野川。徳島にいる頃、子供の頃から、ごくごく当たり前前に身近にある存在でした。徳島を離れた時に、一番に思い出すのは、地元の吉野川であったということが私の根っこに深くあります。

なぜ深く思い込んでいるかという、吉野川は子供の時の遊び場で学びの場でもありました。東みよし町の稲持^{いなもち}という田舎でしたが、丸い石がたくさん転がっている河原が遊び場でした。近所の子供と、石を投げて水切り遊びをしたり、先輩からいろいろなことを教わる場でもありました。水辺に子供たちだけで遊びに行くと、「ここは入ったらあかん」とか、「こういうことをしたらあかん」と教えてもらったり、川の淵の主や、河童がいるとかタヌキが出るとか、そういう川の怖い話も聞きました。また、子供の中のルールで、水溜りのところを飛び越えられたら、一人前の男の子の仲間入りとか。そういういろいろな思い出があって、何か思い出すとなると、やっぱり吉野川が、

ふと幼き頃のあの風景が出てくるなど。そんな感じを今でもやっぱり大きく持っています。

吉野川で思い出す景色に竹林があります。川に沿って竹林があるのは、当たり前でした。何の疑問も持たずに、子供の頃は遊び道具がいっぱいあるとぐらしか思っていなくて、竹で遊んでいました。それをある時、近所のおばあちゃんに「竹の花が咲いてるのを見つけたら、大人に知らせなさい。竹林が枯れたらとんでもないことになるから」と言われました。そして竹林は川岸を守り、根が張るので地震の時にも強いし、川の水が氾濫するのを抑え込んでくれると教えられました。

吉野川沿いの町で、竹のザルや、物差し、和傘などの伝統工芸があることと、吉野川の氾濫の歴史も後にいろいろ聞いて、それがおばあちゃんの教えと少しずつ結びついていくようになりました。

吉野川が氾濫しても悪いことばかりではありませんで

した。山からくる土砂が蓄積して、それが養分になり、洪水で米はできなくとも、藍がよく育ったのです。これは、吉野川の氾濫を利用したもので、何とかここで生活しようと工夫して、藍の文化が発達したのだということも大人になってから地元の方に教えてもらいました。

吉野川の洪水に関しては、今でも身近なところに話が残っています。子供のころから「高地蔵さん」と呼んでいた台座の高いお地蔵さんがありました。この高さは「ここまで水が来てたんやで」ということを教えてくれます。この台座は、洪水の時でもお地蔵さんが水につからないように高くしたもので、一番すごいのは5mぐらいの高さのお地蔵さんも残っています。洪水の時の水位は、吉野川沿いのいろいろな古い建物にもたくさん記録が残っています。

他にも吉野川の流域には、皆に知られていない石碑とか、塔が立っています。過去の出来事、理由や謂れを知っ

て、それがはっきり、こういうものだとわかった今、子供や孫の世代にしっかり伝えていくことが大事だと思っています。今のうちに、おじいちゃんおばあちゃんに聞いておかないとわからなくなってしまうのではないかと危機感も持っています。

私が属している上方落語、大阪の落語の世界では、ネタの中で淀川がしょっちゅう出てきます。私は吉野川をよく知る徳島出身者ですから、子供のころから遊び学んだ川の風景だったり、お太師さんの伝説や、見上げるほどの高さのお地蔵さんなど、吉野川にかかわる話を落語の本ネタや枕の中に入れ込んで、表現していきたいと思っています。私の話で吉野川を知ってもらえたら、何かのきっかけで見たい、行ってみたいと思ってもらえたら嬉しいです。

夕焼けの脇町潜水橋 (写真:徳島県・(一財)徳島県観光協会)

特集

先人たちが編み出した
洪水に向き合う術

MESSAGE

ふるさと吉野川



桂 七福
KATSURA Shichifuku

プロフィール

徳島県出身。四代目 桂福団治一門 上方落語家。

1965年 徳島県三好郡三加茂町に生まれる。

1985年 国立阿南工業高等専門学校機械化卒業。在学中、落語研究部の部長として活動。

1985～89年 徳島県内精密機械メーカー勤務。

1990年 上方落語 桂福団治に入門。作家・藤本義一氏の命名で「七福」となる。

1991年 上方落語協会・関西演芸協会・文化庁芸団協の3団体の正式会員となる。

1997年 故郷・徳島県へUターン。出身地にこだわりを持って、再出発を決意。

[現在] 徳島発信の異色の落語家として、

- ・徳島県内3ヵ所において定期的に落語会を開催。
- ・徳島から全国への講師講演活動・落語口演活動を展開中。
- ・地元徳島県においてテレビ・ラジオでレギュラー番組4本に出演中。